

トヨタ財団  
広報誌[ジョイント]  
October 2021

No.37 【特集】  
ケアと「場」

コミュニケーションの多くがオンラインになるなか、あらためて「場」の持つ意味を考えます。特集ではケアと「場」についての議論を、続く記事では、ある地域における「場」づくりにつながる助成事例をご紹介します。





この夏、新型コロナウイルスによるパンデミックの影響により1年の延期となった、「東京2020オリンピック・パラリンピック」が開催されました。個々の競技についてここでは触れませんが、ある意味で、この非常時ともいえる世界的状況のなかで実行された今回の大会は、その実現に向けたプロセスを含めて、さまざまなことが大きな疑問符をともなっているのか。本来の意味でオリンピックって何だろう、スポーツってそもそも何のためにあるのか、あるいは社会はどうやって動いているのかといった本質的な問題を、開催できたことの喜びとは裏腹に、ある種の違和感のようなものをもたないながら、社会に生きるあらゆる人たちが感じざるをえない大会でした。

私もそんな違和感を覚えた一人ですが、それは一言でいうと、社会感覚とのズレといえます。か、オリンピックって社会のなかで行われるもののはずなのに、なにか社会とは別のところで物事が決まり、実行されているのではないかとといった感覚です。いくらオリンピックは特別なイベントだとしても、社会のなかで行われるものであることに変わりはないし、社会が健全に機能してこそオリンピックであるはずだからです。オリンピック憲章をちゃんと読めば、その本来的な社会における意味、位置付けを読み取ることができます。そこにはオリンピックは勝ち負けを競うだけの競技大会ではなく、ましてや国家間の戦いでもない。個々のアスリートがスポーツを通して競い合うことによつて互いが互いを認め合い、称え合つて、その共感の輪からエネルギーを生み出し、平和のうちに共生することを喜び合う祭典であるとい

## 「共生社会」におけるスポーツの役割



公益財団法人 トヨタ財団評議員  
有森 裕子

うことが書かれているのです。競い合うことが、何か競技とは別の目的をもった争いになつてしまつては本末転倒です。同じ人間同士が競い合うことのなかで共感、共感し合い、互いに身体と心を磨き合うことで、人としての成熟を促すのが本来のオリンピックに求められていることなのです。

**私**は「スペシャルオリンピクス日本」(以下、SON)の理事長をしています。このSONはいま述べたオリンピック憲章の精神と本来違いない基本理念をもっています。競技者は知的障害のある人という特性もありますが、国旗掲揚はしませんし、順位を競つてメダルを出しても、一緒に競つた相手を称え合い、全員ががんばつたと互いに認め合うことを何よりも優先しています。そして、個人で楽しみ、喜ぶだけではなく、「みんな」でスポーツの意義を分かち合うことが大切で、それは人々の生きる力として「社会」に確実に活かされてくるのだと考えています。

SONのアスリートたちは、全員に軽度から重度までの知的障害があります。障害の程度はさまざまなので、まずいくつかのディビジョンに組分けを行い、可能な限り同程度の競技能力をもつたアスリートで競技を実行できるようにしています。一つの組に最少3人、最多で8人に分けられた組で決勝まで行い、競技が終われば全員にメダルあるいはリボンが授与されます。順位上の優劣に依るのでなく、最後まで競技をやり遂げた全員に同等の拍手が贈られます。「勝者」だけでなく、競い合う者すべてが称えられるのが大きな特徴の一つなのです。

**S**ONが2025年までに「多様な人々が活きる社会の実現」をめざして「Be with all」というスローガンを掲げている理由もこのことの延長線にあります。実際、SONがもつ意義はすべてが社会とコミットし、活動も社会とともにさまざまなことを育み、かたちにして伝え、それぞれの地域社会に根付かせていくことを何よりも重要視しています。差別のない多様性を内包した「共生社会」を実現していくうえで、スポーツには大きなちからとなるテーマやトピック、たくさんの方の可能性の芽が含まれていて、社会に及ぼすインパクトも大きいと認識しているからです。

スポーツは目標に向けての自己鍛錬であると同時に、社会の誰もが参加できる表現行為であり、一つの文化です。それなのに、スポー

ツがもつ数多くの可能性を、こわばつた固定観念によつてまだいかに弱めてしまつていないのか。いちばんの障害は人にあるのではなく社会の方にあるのではないのでしょうか。スポーツのもつていく多くの可能性を多様なかたちで提起し、世代を越えて伝えることで、これまで以上にスポーツが社会のなかで、人々が互いを認め合い、称え合い、そして手を携えて、ともによりよい社会の実現へ向けて歩んでいくこと。それが現在の私の願いであり、そのために、実際の競技と同様に全力を尽くすことが私の役割だと自覚しています。

●有森裕子(ありもり・ゆうこ)  
オリンピック2大会連続メダリスト。現、日本陸上競技連盟理事副委員長、スペシャルオリンピクス日本理事長など多くの要職に就く。2020年度よりトヨタ財団評議員

October 2021  
No.37



モザンビークのサバンナ地域に位置するマカベニコミュニティは、リンボゴ国立公園から2013年に強制退去させられ、現在再定住コミュニティとして生計活動を再建中。(本誌 P.22参照)

Photo by Kei Otsuki

### CONTENTS

FIRST WORD ● 有森裕子  
「共生社会」におけるスポーツの役割 …… 2

特集：ケアと「場」

助成対象者オンライン鼎談

●坂井志織 × 中島かおり × 網島洋之  
「場」があることでケアを超えるケアが生まれる …… 5

私たちの取り組み—助成対象者からの寄稿

国内助成プログラム ● 福元知晶  
関係性を多角的に捉え、再構築する場づくり …… 12

研究助成プログラム ● 三島美佐子  
歴史的木製什器との邂逅 …… 14

国際助成プログラム連続オンラインセミナー ● 喜田亮子

小さな積み重ねが長い時間軸の中で  
地域や社会をつくっていく …… 16

国内助成・研究助成・国際助成プログラム  
2021年度プロジェクト一覧 …… 18

「私」のまなざし ④ 大築 圭  
先進国が享受する豊かさはどこからくるのか …… 22

活動地へおじゃまします！〈豊島区上池袋を訪ねて〉● 武藤良太  
“まち”で生活することの実践 …… 24

お茶っこ通信 第十八回 ● 加賀 道  
「温泉旅館の浴衣復刻プロジェクト」始動！ …… 27

トヨタ財団ジャーナル …… 28  
●公募案内 特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」  
●公募案内 特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」他

\*スペシャルオリンピクスとは、知的障害のある人たちにさまざまなスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を、年間を通じ提供している国際的なスポーツ組織で、SONはスペシャルオリンピクスの国内活動を推進する組織として、国際本部より認証をうけている国内本部組織である。





助成対象者オンライン鼎談：「『ケア』から考える社会」

# 「場」があることで ケアを超えるケアが生まれる

坂井志織 × 中島かおり × 網島洋之

司会：利根英夫（トヨタ財団プログラムオフィサー）

前号に引き続き助成対象者の方と「ケア」を考える鼎談を行いました。焦点をあてたのは「場づくり」。新型コロナウイルス感染症が、人が集うことを妨げているなか、「場」の役割とは何でしょうか。そこに集う人々の、ケアをする側・される側といった、一方通行ではない関係についても考えます。

**坂井** 武蔵野大学看護学部で教員をしております。坂井と申します。病いの当事者の方の経験を質的研究、特に現象学的な研究で明らかにして、それに基づくケアを作っていきたいと考えて取り組んでいます。

私は新卒で都内の総合病院の脳神経外科に勤務したのですが、そこで担当看護師として受け持った、脳卒中のあとに「しびれ」を訴える患者さんXさんとの出会いが研究の道に入る大きなきっかけになりました。脳神経外科病棟には脳卒中の方が多く入院されるので、残念ながら発症したときに亡くなる方もたくさんいらっしゃいます。

そのようななかで、Xさんも命の危機的状況に陥ったことがあったのですが、運動麻痺や言語障害のような後遺症が一切なく、日常生活が自立するまで回復されたので、私を含め医療者全員がすごくラッキーな方、幸運な「治った人」だねっていうふうに捉えていたのですが、ある時Xさんが左半身がしびれていると訴えられるようになって、社会復帰できる状態まで回復されていたのですが、温泉施設を併設して

病いの経験を語り、聞く場



## 【特集】 ケアと「場」



皆様は、誰かをケアしていますか。それとも誰かにケアされていますか。

多くの方はケアをしたり、されたり、その両方かもしれません。では、そのケアは、どこでなされていますか。

自宅や病院などは、ケアが提供される（あるいはケアを提供する）「場」として、わかりやすい例でしょう。

他方、物理的な場所がなくとも、人が集まる機会そのものを「場」と考えることも可能です。オンラインで人が集うことも、「場」のひとつと考えられます。



ケアの形態や担い手がさまざまであるのと同様に、その目的や役割に応じて「場」の形もさまざまです。

この鼎談で登場するのは、住民が病いの経験をシェアする場所、ホームレスの方々が集う「農」と「食」という場所、若年女性が安心して過ごせる家のような場所です。

会議室、畑、家、とその形態はさまざまですが、どの場所でもケアが生まれています。

「居場所」や「拠り所」という表現もできるかもしれません。言い換えれば、人が集うことで初めて「場」となっている空間です。

ケアについて、「場」という視点から、あらためて考えてみませんか。





いるリハビリテーション病院に転院されています。

そちらで半年ほどさまざまな治療をされたのですが治らなくて、私が勤めている病院の麻酔科外来でペインクリニックという痛みの治療を専門とするところに治療で通われるようになりまし。外来でもいろいろな治療をされたのですが何をしても改善せず、外来後に病棟が上がってきては顔なじみの看護師にしびれが改善しないという辛さを話していました。

あるとき私が麻酔科外来の担当になった日があったのですが、その日は偶然Xさんの治療の最終日でした。「何をしても治らなくて今日が残念ながら最後の治療だったけど、最後に坂井さんに会えてよかった」と言って寂しそうな顔をして帰られたんですね。それから数日後、しびれを苦しめてという遺書を残して、Xさんが自ら命を絶されたということがありました。その知らせを聞いて本当にショックでびびりました。私は看護師として何もできなかったという自責の念と、Xさんのことを治った人だと捉えていた、何もわかっていなかったなということを担当に強く感じさせられる経験になりました。そこで、この先同じようなしびれを訴える患者さんがいたときに、私はケアとして何ができるんだろうということをごく考えて、いろいろ調べたのですが、先行研究がほとんどされていないことがわかったのです。これはもう自分でやるしかないなと思って、修士、博士に進んで今に至るという経過になります。

今回トヨタ財団の助成で、慢性の病い経験に関する課題に取り組むことになった問題の所在としては二点あり、一点目は現代の病い経験を捉える視点の不足、二点目は医療の見方に対する疑問ということがありました。

近年の医療革新に伴い、完治しないまま生涯付き合うことになる疾患というのがすごく増えています。病いと共生が進む中で、疾患や患者さんの経験も多様化していたり複雑化しています。現代というのは、何十年も疾患と付き合ってきた人たちがいる最初の時代なのではないかと思っています。そのため、それを的確に捉える概念が医療分野においてまだ構築されていないという課題が挙げられます。そして、そこには社会構造の変化も大きく関わっていると思います。

病い経験が個人化され、昔だったらケアする、されるという機会を目にすることもありませんでしたが、どんどん個人に閉じてしまっていることが指摘できるのではないかなと思います。さらに医療実践もエビデンスが強く求められるようになり、ガイドラインなどが作られてさまざまな医療が標準化されるような時代になりました。手術のような多くの人が同じような経過をたどる場面では、このエビデンスベースドプラクティス(EBP)というこ



●坂井志織(さかい・しおり)

武蔵野大学看護学部准教授。しびれや慢性疾患など一見すると病いがわかりづらい・伝わりづらい患者の経験を記述的に示し、新たな理解やケアをつくることをライフワークとしている。現在は、病い経験を地域で共有する取り組み「生き活きカフェ」や、慢性疾患の生を捉える新しい概念生成に取り組んでいる。2017年度研究助成プログラム助成対象者。

異なるケアの構造であって、場があることで半自動的に発生しているものであったり、ここで起きていたことが何だったのかと問うたときに、ケアという概念について新たに考えさせられる要素もあるのではないかと思っています。

### 妊娠をきっかけにした居場所づくり

**中島** NPO法人ピッコラーレの代表で助産師の中島かおりと申します。私たちはもとと一般社団法人にしんSOS東京という団体を立ち上げて、妊娠で葛藤されている方の相談窓口を運営してきました。妊娠がきっかけで相談に繋がる方は、相談のずっと前から妊娠以外のたくさんの困難を抱えています。私たちだけでは必要なサポートを用意できないため、私たち自身がいろいろな人にSOSを出しながら相談者の周りに頼り先のネットワークを作るため面談や同行していくというようなことをしてきました。

### ●中島かおり(なかじま・かおり)

特定非営利活動法人ピッコラーレ代表理事。保健師、助産師、看護師。一般社団法人にしんSOS東京を設立し、その後、公益性の高い事業を幅広く展開するため、ピッコラーレに全ての事業を移管し活動を行う。2019年度国内助成プログラム助成対象者。

それらの課題のなかでも、特に衣食住がままならない状況にある妊婦の居場所をどう作っていくか、ということへの挑戦として、現在小さな居場所「ぴさら」を運営しています。トヨタ財団に応援していただいているプロジェクトが、この若年妊婦

の居場所づくりプロジェクトです。

私はもともと生物学を勉強していたらポワークなどをしていましたが、自分自身の妊娠出産をきっかけにもう一度大学に入り保健師、助産師、看護師の資格をとりました。その後病院や助産院で働いたり、地域の仕事をすることで、ある17歳の妊婦さんと出会いました。1人で子どもを育てていた17歳の彼女のそばに、地域で支える人が何人もいて、私も支え手の1人として加わるうちに、彼らのための制度や法律がこんなにもないこと、そしてそのことについてみんなが知らないということに気がつきました。妊娠は1人ではできないのに、たった1人で抱えている彼らのことを自己責任だと咎めて顔をしかめる、そんな社会の空気を変えられないだろうか、それには地域のまなざしの変容が必要かもしれないと思うようになりました。

団体を立ち上げたのは、子どもの虐待死を年齢別で見るとときに0歳児が一番多いという事実、また生まれたその日に亡くなっている子どもが虐待死の中で一番多いことを知ったのがきっかけです。これを聞いたときに、「これって虐待死なんだろうか」と自分の中で大きな問いがありました。私はそこに至った妊婦たちに、助産師として現場で出会っていないですね。なぜかという彼女たちは母子手帳をもらいに行っていないか、妊婦健診を受けてなかったり、病院での出産をしていなくて、一人きりで妊娠を抱えて出産に至っているからです。妊娠から出産・子育てまで



が持つ力です。いわゆる研究者がひとりで何かを研究し研究成果を提供するのではなく、社会とともに研究成果を作ることができるということ、成果をその場で作りその場で還元できるということ、あとは何か固定した成果があるのではなく、個々の中にそれぞれで成果が生まれてくるということ、それが特徴的であり、面白いところだなと思いました。これが二点目にも繋がるのですが、病いを語る・聞くことの意味ということの見直しというか、再発見ですね。今回の生き活きカフェは日常生活においてこういう場がないということが出発点で始めた企画でした。たとえばセミナーや病院の何とか教室のようなものって結構あると思うのですが、そういう場ではなくカフェという自由な場で病いと共生に触れることが自らの経験に意味を見出す機会となったり、参加者をエンパワーする機会になっていったということがありました。あとはこのなかで起きていたことを考えてみると、ケアをするとかされるというのは



の切れ目ない支援の必要性が言われていますが、まだまだ切れ目だらけで、そもそも支援やサポート自体が存在しない部分があります。私たちはSOSを出す力がある人たちに出会っていますが、妊娠したことでようやくSOSを出しているわけで、その手前で実は本当にいろいろな課題を抱えながら、なんとか自分自身で社会資源を作ったりして生き延びてきているという状況があります。その人のせいじゃないよねっていうような課題をたくさん背負わされているので、自分自身で社会資源を作る過程の中で場を転々としてしまっ、そうすると地域と繋がりがなかったり、せっかく誰かと繋がったとしても関係が途切れるということが起こります。なかでも特に居所がないということがすごく大きな課題だと思っていて、妊娠することによって会社の寮を出ないといけなくなってネットカフェに住んでいたり。妊娠が居場所を失う原因になってしまっ。あるいは、居場所がないことによって転々とする中で妊娠してしまっということが起きていくことを知りました。

特定妊婦としてキャッチできたとしても、彼女たちへのまなざしというのは、子どもの養育について支援を行うことが必要な人たちだという視点です。

いろいろなところに繋がって、いろいろな制度を使う必要があるけれども、全部縦割りでそれぞれの窓口にまだまだ特定妊婦に対して弱いや弱りのようなケアの対象としてではなく、妊娠した経緯に対する自己責任という批判やおなかの中の赤ちゃんに対する虐待予

防の視点が強いことを感じています。

今回トヨタ財団に支援いただいていることによって、利用者のニーズをしっかりと捉え、それに応えるという、妊婦本人の意思を尊重しながら運営することができています。この場所はシェルターではないので地域の中に開かれ、隣近所との接点が生まれる場所としてありたいということ、ルールが少なくて妊娠何週目でも利用できる、産むと決めていても産めないと思っただとしても使ってもらえる。それから上の子がいようと一人きりだろうと、未成年だろうと、どうやったら使えるかを一緒に考えるということ。あとは利用に費用がかからないということですね。必要なものが全てここにあって、なければ用意をする、そして安心して休んでもらえるということが一番大事に思っています。

先ほど坂井先生がおっしゃっていたことは本当にそうだなと思っていて、利用者同士が自分の経験を語ることで自分のことを再認知していくみたいな過程があったり、私たちも彼らの語りから彼らのこれまでの人生を知ることによって、だんだんと利用者さん像がそれぞれできてくるような時間を確保できます。「ピヤラ」のスタッフに専門性があつたとしても、専門性だけではこの場にいられないんですよ。おうちっぽい場所ですし、「私」としていかないで逆に居心地が悪いみたいな……。支援される側とする側というところはどうしてもゼロにはできないけれど、お互いに対等というか、そんなことがあるんだ、教えてくれてありがとうみたいな、利用者さん

2011年から続けてきています。活動のなかで、若者向けの就労支援で農業を活用すると、もちろん社会適応の基礎となる体力も向上させられるのですが、同時に社会適応という目標自体を相対化することができるので、一つの可能性としては社会に適応しなくても生活できる場所を創出する就労支援、これはひょっとしたら就労拒否支援と言っ方がいいかもしれないですが、そのような可能性があることがわかりました。それまで都市で生活してきた人にとって農作業というのはやはり難しいものでもあるということも同時に覚えてきました。

ホームレスの方のような生活困窮者を対象とする農福連携の場合は、自律的に資金を回転させようとしたがうまくいかなかったとか、他の事業の売り上げでなんとか運営しているというような事例があって、自らの売り上げだけで最低賃金並みの賃金を支払うことは未だ困難であるといえます。とすると、この農福連携というときの福祉の福ですけど

も、これは就労機会の提供を通じた金銭給付のことなのか、しかしそれはやはり難しいので金銭には還元できない他の何かを提供すべきではないかという問題が出てきます。

ある参加者のもとで親が経営していた食堂の手伝いをしていて、食材の買い出しを担当していました。食材の姿がわかるので収穫は得意だったわけです。食材の姿から逆算して、こういう食材を得るためにはこういう作業をしたらいい、というようなことがある程度わかっていたらいいというわけで、今は農園の一角を自律的に耕して自分で販路を開拓している参加者がいます。

この例にヒントを得て、「おとな食堂」というものを他の仲間と一緒に開設しています。作業に報酬は払わないけれども収穫したものを翌日にみんなで調理して食べる。それだけでは余りが出るので、他の人にも食べてもらう。自分たちで食べる分を作り、他の人と分かち合う。これが実は、日本では有機農業運動から派生した産消提携というものに近

い考え方なのです。

なお、労働市場から排除された人々が、金銭ではなく、ある種の喜びを得るために働こうとするとき、ある課題が生じます。つまり、働いても十分な金銭が得られない人は、労働に喜びを求めたいいけないのかというところを、社会に向け

から教わることもあったりして面白いなと思っっています。一方で、自分だけの個室があるので、ひとりで閉じることもできます。空間を行ったり来たりしながら過ごせるから時間をかけてゆっくりと回復ができるのかもしれない。

## 生活困窮者のための農福連携

**綱島** ご支援いただいている研究テーマが、「農福連携において労働者の自律性を高めるために産消提携の経験を援用する試み」というものです。元々このプロジェクトは助成をいただくはるか以前から続いていることで、仕事作りというところから始まっています。その背景には、ホームレス状態にある人は仕事に欲しいけれど、条件が悪くない仕事を見つけないのが非常に難しいという現状があります。いろいろな団体が就労支援を頑張っやっていますが、残念ながら限界があるようです。

仕事作りというものを考えるときに、これは誰が言ったことかわからないのですが、三原則というものが大阪などでは言われてきました。労働者が納得できる、何らかの社会的課題の解決に繋がる、それから他の労働者の仕事を奪わない、この三つです。もう10年も前になりますが、これを満たすことができるのは農業なのではないかと私は感じました。これまでやってきたプロジェクトとしては、耕作放棄地を再生して農業分野での就労機会を作る、こういうアクションリサーチを

て問う必要が出てきます。いくら稼いでも喜びを得られない人たちから「稼げないけれど喜びを求めるのか」というようなメッセージが危惧されるからです。

自分でなにかを実践して初めて課題の当事者になることができると思います。私の例としては、自分で実践に参加して自らの肉體で疲労を感じることで、自分でなんとか現状を改善しなければならぬと心の底から思うことができるのではないかと考えています。

## 自由に参加し、ライトに繋がる。

**中島** 坂井さんにお聞きしたいのですが、生き活きカフェのような場合はアフターフォローが必要な人とか、継続的な関係性みたいなものが生まれてくるようなことがあるのか。どんなことがそこで起きているのかということをもう少し教えてください。

綱島さんにお聞きしたいと思ったのは、働くときに自分を監視しなくてよいというようなお話が出てきましたよね。それをもう少し掘り下げてお聞きしたいです。

**坂井** ご質問ありがとうございます。生き活きカフェですが、研究メンバーがファシリテーターとして運営するので、頻繁に開催することが難しかったということもあり、助成期間2年間で開催したのは5回です。東京と大阪の同じ地域で3回と2回開催しました。カフェでは同じ人たちと話していくとやはり語りがちよっと固定化してしまうので、2〜



● 綱島洋之(つなしま・ひろゆき)

大阪市立大学都市研究プラザ特任講師。幼少のころから生物に興味を持ち、生物の研究をしたくて大学へ。しかし、高校では「お前は研究する方ではなくて研究される方だろ」と。その指摘は正しいと今では思う。他者の営みを高みから観察するような研究の在り方に違和感を覚え、自ら鎌を手取る。2018年度 研究助成プログラム助成対象者。



3回グループ替えをしてメンバーを替えるようにしていました。初めての方と沢山知り合うことで、そこでまた話しながら繋がりが広がって蜘蛛の巣みたいになっていくところがユニークな対話の重ね方の一つなのかなと思いました。アフターフォーが必要方や継続的な関わりというのは、回数的なところもあって難しかったです。

あと、この生き活きカフェという場が継続的なフォーというよりもライトな繋がりというか、気軽にぽつぽつと行けるカフェ的自由に参加できるところが一つの良さだったのかなと思っていて、フォーが必要という方は基本的にはいなかったと考えています。ただ継続して参加してくださった方の中に、奥様が脳血管疾患を患って半身を動かすのが難しくなっているご夫婦が3回来てくださったのですが、だんだんその奥様の体調が良くなっていくのが私たちも見てわかって、同じように何回か来てくださっていた方からも、元気になってよかったねと言われるようなことがありました。

**綱島** なかなか仕事に就けない若者が、就労支援を行っている事業体のプログラムの一環として農作業に来ていたときの話です。当時参加していた団体は、まず、なぜその人が仕事に就くのが難しいのかという原因を探ろうとしていました。たとえば発達障害があるんじゃないかとか、そういういろいろな個人の特性をまず見出そうとする。一日特性が見出されると、実際に作業をしながら、自分の特性に対して自分の苦手なところをカバーする

う何か正しい形のようなものがあるように感じています。その「こうあるべき」によってみんな苦しいのではないでしょうっか？

「びさら」には枠がありません。出産する人も中絶する人も、育てる人も育てない人も、本人がここにいたいと思えば誰でも利用できる場所でありたいと思っています。そうあることによって小さな場所ではあるけれど、家族の形や妊娠出産のさまざまなありようがあっというんだという雰囲気や地域の中に生み出せないだろうか？

「びさら」を利用する人は一人一人いろいろな家族のなかで育ってきていて、いろいろな家族像を持っています。

「びさら」が地域に開いていることによって、ここでいろいろな人と出会っていった地域の知り合いも増えていきます。その子がたとえばスーパーで「びさら」で会った人に会うみたいなおききで、声をかけてもらったり、子ども食堂をやっているNPOさんの子ども食堂に出かけていくみたいなおききをする、隣近所のつながりが生まれて彼女にあっての居場所が増えていくんですよね。その子ども食堂も彼女にとっての地域の中の居場所になっていきます。

私たちがいっぱい居場所を作らなくても自然に生まれていくのはすてきなことだと思えます。こんなふうに居場所がたくさん生まれるプロセスが生み出される場所としても「びさら」が役割を担えればと思います。情報弱者に関しては、情報はもともとWi-Fiなどの通信手段自体をみんなが持っているもので

ように努力する、そういうことが求められていたんですね。

そうすると当事者の若者たちは、自分は周りの人からどう見えているのかということを考えなければなりません。ですが、これは就労支援の場面に限った話ではなくて、私たちが普段人間関係を持っていくなかで、自分からどう見られているかということを感じなければならぬ場面は多々あると思います。特に就労支援を受けている若者たちは、自分がどう見られているかが気になって思い通りの行動ができない、少し思い切ったことができなかったりというようなこともあったんですね。だから、ちょっとしたことでもぐに気疲れしてしまう。就労訓練でどこかの作業現場に行っただけで消耗して、午前中だけで疲れて帰ってしまう。しかし、そういう人が農作業をやっていると、なぜかそれを気にしなくて済む。なぜかという、目の前の作物に向かって必死に雑草を取ったり、あるいは必死に木の根っこを掘り取ったりとか、そういうことをしているだけでよい。周りからどう見えるかということその作業の成果が全然関係ないとなると、自分自身を監視しなくて済むようになるということです。

たとえばお客さんになにかを売ってお金をもらうというような作業だと、もしうまく物が売れたとしても、お客さんから見て気にならなかったら次から来てもらえないだろうとか、そういうことまで気にしなければならぬわけですが、自然が相手の作業だとそれを気にしなくて済む。ですから、自分を監視する気にならなくて済む前提があるのですが、そういう人たちがどうやって私たちに繋がるかということ、コンビニのWi-Fiで繋がってきたりするんですね。通信はインフラだと思っただけで、情報弱者は圧倒的なウィークポイントとして携帯のような通信できる機器を持っていないとか、持っているても料金滞納で止められているとか自宅Wi-Fiがないような状況にあって、もともと繋がりがづらい。

**綱島** 坂井さんから最後にいただいたご質問、園芸療法についての意図があったかどうかということですが、恥ずかしい話、始めたときには園芸療法というものについてあまり詳しく知りませんでした。実際にプロジェクトを始めるようになってから関連する資料を集めなければということ、園芸療法についての資料も集めるようになり、確かに重なっているところが多々あるなと思うようになりました。ところが日本には園芸福祉という言葉もあります。これは、園芸療法は療法だけでなく、園芸のいいところというの、療法を必要としない人も楽しめることだと思っただけ、どちらかという園芸福祉という言葉の方をよく使うのですが、本質的にさほど違いはなく、たまたま私が最初に無知だったというぐらいのことだと思えます。

**利根** ありがとうございます。今日の議論、私にとっても非常に参考になりました。最後に、今日の感想をいただければと思います。**坂井** 今回お二人とお話できて面白かったなと思ったのが、健康であるとか、妊娠・出産とか、労働とはこうあるべきだ、みたいな強

ること、つまり自己管理というのはむしろ私たちが普段日常的にやっていることであって、農作業をやっているときだけそれから解放されるということがあるのではないかと考えたわけですね。

### 横の連携を広げ「場」を開く

**坂井** 中島さんの「びさら」の取り組みはすごくいいなと思います。緩やかな家族というか、家族ってという血縁だけと思いがちですが、「びさら」のような形の、いろいろな繋がりを持った家族ってという概念も、新しく作り出されていくような活動なのかなと思って聞いていました。

どうしたらそういう居場所が必要な人に必要な数だけ作っていきけるのか、今後どんな取り組みを考えてらっしゃるのかお伺いしたいです。二つめは妊娠のところで情報弱者のような女性もすごく多いのではと思って、正しい情報に正しく繋がるためにはどんなことが必要かお考えをお聞かせいただけますか。

綱島さんにひとつお伺いしたいのは、今回の取り組みは医療の中だとよく園芸療法と言われる手法に近いところもあると思っただけですが、その辺を意図された取り組みなのかどうなのかを教えてください。

**中島** 坂井さんのご経験を教えてください。ありがとうございます。

性と生殖に関わることはひとりひとり違いますが、相手があることは思い通りにはならないにも関わらず、社会の中にこうあるべきとい

すぎる日本社会の規範から逸れてしまった人々、住みづらくなった人々に対してケアの場を作るとか、場があることで新しい形でケアを超えるケアが生まれてきているのではないかと考えさせられて、私もケアという概念にとらわれずじっくり考えていきたいなと思ったセッションになりました。ありがとうございます。

**中島** 今夜、どうやってたら屋根があるところで、布団にくるまって寝られるだろうかと……ということにエネルギーを使っていた人が、そこに使わなくて済むようになることによって、ようやく他のことに気持ちと体を使えるようになることを、そこにいる彼らから改めて教えてもらっています。安心できる場所でも安全な関係性の中で、ゆっくり過ごすことだけでも、セルフケアだったりケアをし合っているというか。彼らと一緒にいると、私たちがマインドが開いていきます。「場を開く」の意味は、人がいっぱい出入りするということではなく、みんなの心がちょっとずつ開いていって、新しい価値観や新しい繋がりが生まれて、自分に変化するみたいなことが起きる、すごい化学反応だなということをおもいます。

**綱島** 今頃になってなんかだんだんやっとなりが慣れてきて、皆さんにお聞きしたいことがいろいろ出てきた。またの機会にお伺いできればなと思います。横の連携が広がっているところに非常に希望を感じます。私もぜひそこに加えていただければうれしいです。今日はどうもありがとうございます。

※本オンライン鼎談は、誌面に載せきれなかった内容を含めた拡大版をウェブサイトに掲載する予定です。



# 私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

今号では「場」づくりという視点から、国内助成プログラムから1件、研究助成プログラムから1件のご寄稿をいただきました。



2019年度国内助成プログラム「しらべる助成」  
「助成題目」離島のあたらしい放課後創造プロジェクト——屋久島を教育の先進地に!

## 関係性を多角的に捉え、再構築する場づくり

◎福元知晶（離島のあたらしい放課後創造プロジェクトチーム）

### 屋久島の魅力を知る機会がない子どもたち

離島のあたらしい放課後創造プロジェクトチームは、NPO法人HUB&LABO Yakushimaのメンバーが中心となり、鹿児島県の屋久島において小学生を対象とした放課後の場づくり（通称：島子屋）の活動を行ってきました。

本プロジェクト立ち上げの背景には、屋久島におけるコミュニティの課題があります。島で生まれ育った子どもたちが、中学や高校で本土の学校に進学することは、島をはじめとした地方の「あるある」かもしれません。町発生の令和2年度統計屋久島の年齢別人口によると、15〜24歳の割合が4.57%と極端に少なく、若者の島離れは解決すべき課題です。進学先や就職先が少ないという実情もありますが、私自身が島で生活をするな

かでもとくに気になったのが「屋久島って何もないよね」という言葉です。都会を羨むそんな声を、身近なところでよく聞くことがあります。

実際のところ、屋久島には本当に「何も無い」わけではありません。ご存知の通り、世界自然遺産に登録された豊かな自然や、そこで培われてきた文化や営みがあります。しかしながら、島に住む子どもたちがこうした環境を知りながら成長しているかという点、必ずしもそうではないのです。

屋久島は観光業をはじめとする第3次産業に従事する方の割合が最も多く、全国平均に比べ共働き世帯が多い傾向があります。「忙しくて子どもと遊ぶ時間がない」と悩みを抱える保護者の方の声や、せっかく屋久島に住んでいても、放課後はゲームや動画視聴ばかり……という話もめずらしくありません。

子どもたちの非認知能力を伸ばす試みとして、独自の評価指標を作成したうえで、経験学習と意識強化のサイクルを回すテスト事業を行いました。たとえば、ある保護者の方が「自信がないのではないかと感じていた子に対して、テスト事業のなかで、自己肯定感や自尊心が感じられる言葉や行動を何度も見取ることがありました。保護者の方にそのエピソードを伝えると、とても驚いた様子で「うちの子の意外な一面を知ることができた」とうれしいフィードバックをいただきました。

環境という目に見える空間のことをイメージしがちですが、さまざまな人や物との関係性も、環境のうちの1つです。一面的だった子どもへの理解が、第三者の介入により多面的になることが、子どもへのかかわりを変え、子どもたちを取り巻く環境を変えるきっかけになると考えています。

助成期間終了後の取り組みとしては、夏休み期間中に「島子屋たんきゅうキャンプ」を実施しました。



ものづくりを通して非認知能力を見取る

子どもたちの非認知能力をより多く観察できるよう、ものづくりの要素を取り入れ、放課後では時間的に制約のあった自然体

験も思いっきりしたのしめるようなプログラムにしました。今後は長期休みの宿泊型イベントを継続していくこと、あわせて経常的に事業を実施できるよう空き家を活用した拠点づくりを目指しています。

### 対話型共創コミュニティを目指す

また私たちNPOは、子どもから大人までの幅広い世代に向けての環境教育事業を展開しており、一般対象のプロジェクトとして「イマジン屋久島」という事業をおこなっています。昨年度、鹿児島県からの委託を受け「持続可能な屋久島づくり構想策定事業」として屋久島町との共催で実施しました。これまでも「屋久島未来ミーティング」という対話の場づくりを行ってきましたが、イマジン屋久島では、対話だけでおわるのではない「対話型共創コミュニティ」を目指しています。

対話の先には、屋久島の持続可能な未来を見据えています。その未来に向かって共にアクションを起こせるよう、島民主体の実行委員会を立ち上げ、SDGsスタートアップフォーラムやプレビジョンづくりワークショップ、持続可能な社会について学ぶオンライン講座、アンケート・ヒアリング等を重ねて、島民自らが考える「30年後の屋久島」に向けたビジョンマップをつくりあげました。つまりは対話によって「持続可能な屋久島」という共通認識への解像度を高めながら、個人の想いをあらためて問い、人と自然、人々との関係性を編み直していく取り組みであるともいえます。現在はイマジン屋久島にかか



キャンプでは沢登りに挑戦した子どもたち

そこで私たちは、近年教育現場で注目を浴びている「非認知能力」に着目し、その科学的根拠の実証から子どもたちの非認知能力を伸ばすためのプログラム開発と実践までを、プロジェクトとして行いました。非認知能力とは、自己肯定感、好奇心、コミュニケーション力など、学力などの知能と対比され、数値で測ることのできない力のことをいい、子どもの将来に良い影響を与えることが明らかにされています。そして非認知能力は、直接的な介入が難しいことから「環境の産物である」といわれているのです。

### 子どもたちを取り巻く環境を変えるきっかけ

島の豊かな環境をいかして子どもたちの育ちをサポートし、その子にとっての良い将来へ自らの足で歩んでいける力を身につけること。それが離島だからこそできる教育のあり方であり、持続可能なコミュニティをつくることの第一歩なのではないかと考えた

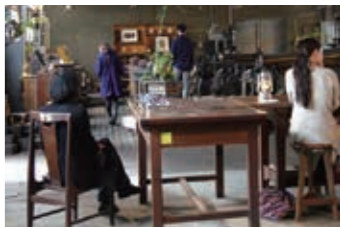
わたたそれぞれの方が、個々の活動や協働するプロジェクトにこのビジョンをタグ付けする形でプロジェクトをすすめており、年内には再びフォーラムの開催を予定しています。

しかしながら、屋久島も例外なく新型コロナウイルス拡大の影響を受け、関係性という大切な環境が失われつつあります。そんな今だからこそ、目に見えない関係性を捉え直し、再構築する場をつくることに、ますますの必要性を感じています。これからの未来を担う子どもたちに、「持続可能な屋久島」を大人が体現する背中を見せ、その環境を引き継いでいくことができるように。場づくりの力を信じて、今後も粘り強く活動していきたいです。



持続可能な30年後の屋久島ビジョンマップ





## 歴史的木製什器との邂逅 「モノ」が「場」とひと

●三島美佐子（九州大学総合研究博物館）

「場づくり」をウェブ検索してみたら、さまざまに解釈されたり深掘りされた記事がたくさん上がってきた。これまで筆者の「場づくり」への理解はごくごく単純で、物理的な「空間づくり」と同義だった。

### 歴史的什器研究のはじまり

私たちにとって一番身近な「場」は家内や室で、その空間づくりに欠かせないモノは「家具」だろう。筆者の職場である「大学」には、家具の他にも器具や展示台などの備品が様々あるので、それらをひっくるめて「什器（じゅうき）」と呼んでいる。

筆者が現在務める九州大学は大正元年（1911年）の創立で、幸い戦禍や天災を免れたため、創立以来導入されてきた戦前の木製什器が戦後も普通に使われていた。ところが2005年からキャンパス移転が始まると、引越しを契機に什器の大量更新が始まる。歴史的な木製什器（以下歴什）がむげに廃棄されていくのを看過できず救済・収集しはじめたのが、この助成研究に至るきっかけである。

### 現代日本の古いモノに関する課題

明治維新以降の西洋の文化・習慣の流入により「新しいモノのほうによりよいモノ」という観念が形成され、さらには戦後の高度経済成長を経て大量消費と使い捨てに慣らされてしまった現代日本において、古さは「モノを捨てる理由」でさえある。

日本の家具文化の歴史が浅いこともあり、身近な歴史的什器にも価値があるという認識は低い。古民家や近代建築が文化財化やリノベーションで再利用される一方で、建物の中で同じ時を経たはずの家具類が、一掃されてしまう傾向がある。歴史的・文化的価値の検討や評価が一切なされないまま什器が廃棄されたり単なる「古家具・古道具」として流通したりすることへの問題提起も本研究の一つの目的だった。

### 古いモノへのまなざしの変化

そこで本研究では、古民家や近代建築のように、活用前提で保存・継承される「活用文

（吉田2017）。ちなみに九大の歴什でよく使われているナラでは、胸高直径60cmに育つのに60〜150年ほどかかるらしい（ただし25mまで成長するわけではない）。さらに戦前什器の無垢材は、板厚4〜5cmとか板幅50cm前後はザラで、そんな大きな一枚板はやはり樹齢の高いものからしか取れない。前出の吉田は「歴什で森を作るんだ」と言いながらせつせと新キャンパスへの「植樹」をすすめている。

大きな森の一画が日々の生活空間にあるなんてとても素敵だ。「在野保存」で歴什がかたわらにあるということはそういうことであ

り、それは人々の日々の暮らしにおける心持ちを変えるかもしれない。

### うきは市での試み

本研究で「在野保存」をすすめていくうちに、「歴史的什器がかたわらにあること」が人々や空間にどのような影響を与えるかを明らかにしたくなってきた。そこで計画変更して取り組んだのが、福岡県うきは市での実践と参与観察だ。ただ、最初から狙ってうきは市で取り組んだというわけではなく、歴什というモノがきっかけで次々と展開していった、まさにそんな感じである。



①在野保存先の「魚部カフェ・バイオフィリア」（北九州市）で実施した「家具計測ワークショップ」。②歴什をきっかけとした「場づくり」となった、うきは市内の倉庫での「DIYワークショップ」。③うきはの倉庫完成内覧会で、ワークショップ参加した皆さんと。

2018年のキャンパス移転のさい収集什器の保管場所に困っていた時、縁があり、うきは市の市役所や事業所のご協力で、収集歴什の7割ほどを廃校校舎と倉庫に保管させてもらえることになった。後者の元々家具工場だった倉庫が非常によい雰囲気だったので、保管家具をうまく配置して素敵な空間にし、そこで博物館ワークショップなどを実施して市に恩返ししたいとも考

化財」という考え方を提唱し、そこに歴史的木製什器を位置付けることを目論んだ。そもそも文化財法でいう「文化財」に含まれていないモノは「家具」をはじめ現代日本にたくさんあり、近年は「文化資源」という概念で捉えることが定着しつつある。

しかしそうこうするうちに、文化財法の改正で、「文化財」を可能な限り積極的に活用することや、評価が定まらない「文化財未満」の有形・無形物（つまり文化資源のこと）も保全・活用を推奨することが明文化された。かくして課題の一つは、期せずして自然消滅しつつある。近年日本でも建物のリノベーションやレトロ復刻が流行していることとあわせ、古いモノへのまなざしは明らかに変化してきたと感じている。

### 「在野保存」という新たな保存活用方策

とはいえ、具体的にどのように保存しつつ活用すればよいだろうか？ 新たな方策として歴什で実践しているのは「在野保存」だ。家具としての本来機能を発揮させつつ次世代に継承するため、博物館の保管庫から解放しつつ、手入れしながら大切に使用してくれる民間や公共に歴什を貸し出し、世代交代のときには正式に次世代に引き継ぐか返却してもらう。本研究はこの「在野保存」の実効性やあり方を検証しようとしている。

価値の変換として「在野保存」は「植樹」でもある。本研究の共同研究者である吉田による試算では、歴什の両袖教授機1台が、直径60cm樹高25mの樹木の材積に相当するというえた。

本研究の一環として人々に古いモノへの価値を問いかける実践にすべく、地元呼びかけ、うきは市の有志の皆さんなどと一緒にDIYで倉庫を整備していった。やはり歴什の吸引力は絶大で、それが見たくてDIYに参加した！ という方がいたし、皆歴什の雰囲気を楽しんでくれたようだ。新店舗の壁塗りを自分でしたのでその練習にちょうどよかったという方や、こういう事が好きだからと毎回参加してくださるような方もいた。このうきは市での実践や地元の方々との交流では、研究以上に学ばせていただき本当に多くの気づきと今も続く繋がりをいただいている。

### モノから立ち上がる「場」

この原稿依頼をいただいたさい、本研究での取り組みが「人と家具が日常生活の中で自然と交流する「場づくり」にも通じるものだったのでは？」というご指摘を財団の加藤さんからいただいた。そう言われればたしかにこれらは物理的な「空間づくり」を超えた「場づくり」だった。

歴什というモノから出発している筆者としては、モノをきっかけとして、ゆるやかに人が集まりなんらかの「場」になるような、自然発生的なものになればいいと思っている。歴什から立ち上がった魅力的で森の一片でもある空間が、新たな「場づくり」のきっかけや、その場が長続きする要素になることを願う。



国際助成プログラム連続オンラインセミナー「国際協働プロジェクトの倫理と論理を考える」(第2回、第3回)「モデレーター喜田亮子さんからのメッセージ」



●喜田亮子(一般財団法人町田市地域活動サポートオフィス事務局長)

## 小さな積み重ねが長い時間軸の中で 地域や社会をつくっていく

トヨタ財団国際助成プログラムでは、「アジアの共通課題と相互交流——学びあひから共感へ——」という趣旨のもと、セクターや国を超えた多様なバックグラウンドを持つ人々が、同じ課題に取り組み仲間として協働・共創し、社会変革につながるパートナーシップ関係を構築するプロジェクトに対して助成を行っています。

2021年8月より、国際協働の根底にある哲学や考え方、実施上のポイントやよくある壁などについて、助成対象者と外部有識者が議論する場として、4回シリーズの連続オンラインセミナー「国際協働プロジェクトの倫理と論理を考える」を実施しています。そのうち第2回「場の創り方」および第3回「地域との関わり・つながり」のモデレーターをお務めいただいた喜田亮子さんに、セミナーを振り返っての感想をお寄せいただきました。

過去のセミナーのアーカイブは、トヨタ財団のYouTubeチャンネルで公開しています。

トヨタ財団公式 YouTube チャンネル

youtube.com/c/TheToyotaFoundation

### プロジェクトの中から生まれた価値

トヨタ財団国際助成プログラムの主催セミナー「国際協働プロジェクトの倫理と論理を考える」の第2回、第3回のモデレーターを務めた。

各回ともにとても刺激的で示唆に富んだ発言が登壇者からあり、私自身が地域の現場で感じていることと共鳴することも多かった。そのエッセンスをここで紹介したい。

第2回のテーマは、「場の創り方」第3回のテーマは、「地域との関わり、つながり」。取り上げたプロジェクトは、第2回が東南アジアの小規模農家同士の経験交流を通じた若手農家の育成、地方在住インドネシア人と地域の人々が協働してつくりだす「外国人材でつながる」文化他、第3回は、東アジア包摂都市ネットワークの構築、アジア大都市圏の未公認集住地の未来を描くことを目的としたプロジェクト。それぞれ大学の研究者やNPOのスタッフなど多様なメンバーが登壇して開催された。

二つの回に共通した問いは、「外部者」が関わることによって当事者や地域にもたらす「価値」とは何か、そしてその「価値」を生み出すための「外部者」としてのふるまい(=倫理)はどのようなべきかである。

一つ目の問い「国際協働プロジェクト」から生まれた価値について。各プロジェクトのフィールドは、被災地、農村部、大都市周縁部の「条件不利地」と多様だが、共通しているのは、そこで暮らす人々が時に制度や計画や秩序の外で、暮らしを豊かにするための工夫を重ねている地域であること。それぞれの地域で育まれた資源や機能の持つ「価値」が学び合いの中で(再)発見され、そのことを通じて関わる人達の視点が変わる。それが自己変容につながり、さらに当事者たちをとりまく現地社会に波及していくといった点だ。

### 国際協働プロジェクトを支える「倫理」

価値を生み出すために、外部者が関わる際の「倫理」(ふるまい、大事にしたい価値観、意識していること)について次に整理したい。登壇者の一つひとつの発言が印象的だったの、(1)(2)(3)を紹介する。

#### 【第2回】

- コンテクト(現場の状況)とテキストもともとの計画の相互生成
- 現場での偶発性や創発性を重視する
- 偶発的に起こった小さな種をいかに全体に広げられるか

#### 【第3回】

- (地域にあるものを)ほめてほめてほめまくる(のも外部者の役割)
- 対立の中でどう平和を守るかも研究者の役割
- 地域の外側・内側でなく、地域の先輩・後輩という関係
- 外だからどこまでできることを戦略的に
- その地域に暮らし続ける人へのリスペクトを忘れない

これらの発言は、私自身が地域の現場で日々抱える悩みに対して大きなヒントとなった。現場には、とにかく多様な人が存在する。国内であれば言語、宗教といった違いは比較的小さいかもしれないが、それでも職業、世代等による文化の違いはある。特に、そこで暮らす住民と外から通って関わる人(往々にして仕事として関わる人)の関係は、時に対立的になったり、上下関係が生まれたり、相互不信に陥ったりと複雑だ。

私自身、外から関わるという立場なのでその難しさは日々感じている。「私たちはボランティア、あなたたちは仕事でしょ」「あなたは逃げられる、わたしたちは逃げられない」「という壁をどうやって乗り越え、どのようなスタンスで現場に関わっていくか。深さは? 期間は? 客観性は? 等々答えが出ない課題の一つだ。

第3回に登壇した神吉紀世子さんの「都市計画の専門家は地域の未来を変えてしまう責任がある」からこそ「個人としてできる範囲

でつき合いつづける」という姿勢は、「そうかそうだよな、それでいいんだ」と思う発言であった。責任があるということ意識すると同時に個人としてできる範囲を行ったり来たりすること。それを粘り強く続けること。実際、どのプロジェクトも長期にわたる交流の積み重ねの上に実施されていた。

計画を立て、仕組みをつくってそこに暮らしや人を当てはめるのではなく、一人の人から、暮らしから積み上げて発想していくこと。職業として関わる人も、住民も、専門家も、時に組織や立場から離れて、個人であること大切にできないか。

「地域活性化」「地域課題の解決」「国際協働」という大きすぎるメッセージを「私はこれが大切だと思う」「これですてきだよね」と「わたし」を主語にした言葉に変えていく。それを拾って言語化して普遍的な価値を発見する。その小さな積み重ねが、長い時間軸の中で地域や社会をつくっていくのではないか。

トヨタ財団国際助成プログラムが掲げている「相互交流」は、ある意味では手段ではあるが、そのプロセスそのものを目的(成果)としてとらえる視点も必要なのかもしれない。最後にそれぞれのプロジェクトは、その実践の内容もそこから見出された論理もとても面白かった。ここではその点についてあまり紹介できなかったのですが、トヨタ財団のウェブサイトにYouTubeチャンネルで、セミナー動画や各プロジェクトの実施内容などを見たい。現場での実践に大いにヒントとなると思う。



代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
安藤 希代子	障がい者の人生の多様な支え手が参画するプラットフォームづくりで倉敷を福祉の街へ	543	岡山県
谷 茂則	都市に取り残された森の多世代・多分野共創によるプラットフォームとしての再構築	550	奈良県
辻岡 秀夫	多様な若者が生き活きと社会参加できるまちづくり — 「わらしべワークプロジェクト」	456	東京都

## 研究助成プログラム

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
池内 朋子	社会的孤立高齢者が支援を拒む要因の解明 — 迷惑をかけてもいい社会をめざして	620
シャリフィ アユーブ	COVID-19がコンパクトシティ化に及ぼした影響評価と人・環境・テクノロジーの相互関係に基づいたグリーンで公正な復興のためのシナリオの模索 — 東京と上海における洞察	640
天島 大輔	24時間介助が必要な重度身体障がい者の就労にむけた実現戦略 — 介助付き就労を阻む社会システムの合理性を運動論から問いなおす	580
鈴木 研悟	ゲーミングを活用する持続可能な将来ビジョン共創の提案 — ミニ・スマートアース構想を題材として	620
佐藤 絵理	地域を超えたピアサポートを実現するひとり親支援プログラムの開発 — 「主体性」の回復から「新しい連帯」が実現する過程の検証	540
松山 聖央	ヒトとモノの承認関係を手がかりとする「自宅」環境の包括的研究 — 環境美学、建築・都市計画論、芸術実践の融合的アプローチから	350
阿部 朋恒	地域で学ぶ・地域と学ぶ — ICTを活用したネットワーク構築型フィールド教育モデルの開発	450
佐藤 理恵	コロナ禍での交流減・政治不信により深刻化した若者の政治離れ解消のためのDX活用による市民参加型地方自治プロセスの研究	600
歌川 達人	日本映画業界におけるジェンダーギャップ・労働環境の実態調査	400

## 国内助成・研究助成・国際助成プログラム

# 2021年度プロジェクト一覧

2021年度に採択された国内助成プログラム12件、研究助成プログラム9件、国際助成プログラム10件のプロジェクト一覧です。

※掲載内容は2021年9月28日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

## 国内助成プログラム

### 1) 日本社会における社会サービスの創出や人材の育成

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
内海 康雄	漁業におけるIT活用と地域プラットフォームの構築 — 安全で豊かな身近な海に暮らす	1,900
阿部 真紀	デートDVチャット相談システムから、学生と共に創る人と人が繋がる社会	1,900
根木 佳織	企業のもととサービスが支援団体とつながる — デジタルプラットフォームサービスの創出	1,600
高原 達也	互助を軸とした音声 SNS プラットフォーム	1,600

### 2) 地域社会を支える共創によるプラットフォームの創出や整備

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
奥野 貴士	未来に繋ぐ、想いあう地域の作物栽培文化	458	山形県
マリyam 戸谷玲子	外国人と日本人が共生・協働する多文化まちづくり構築プロジェクト	424	愛知県
長島 崇史	自然共生の価値創造に取り組む共創プラットフォームの構築	555	新潟県
宝楽 陸寛	生活の質を高める子育て応援地域プラットフォーム「まちの家事室・泉北ラボ」創出事業	514	大阪府
成清 仁士	まちで次世代を育てる学びの拠点と仕組みづくり — 倉敷シティキャンパスプロジェクト	500	岡山県



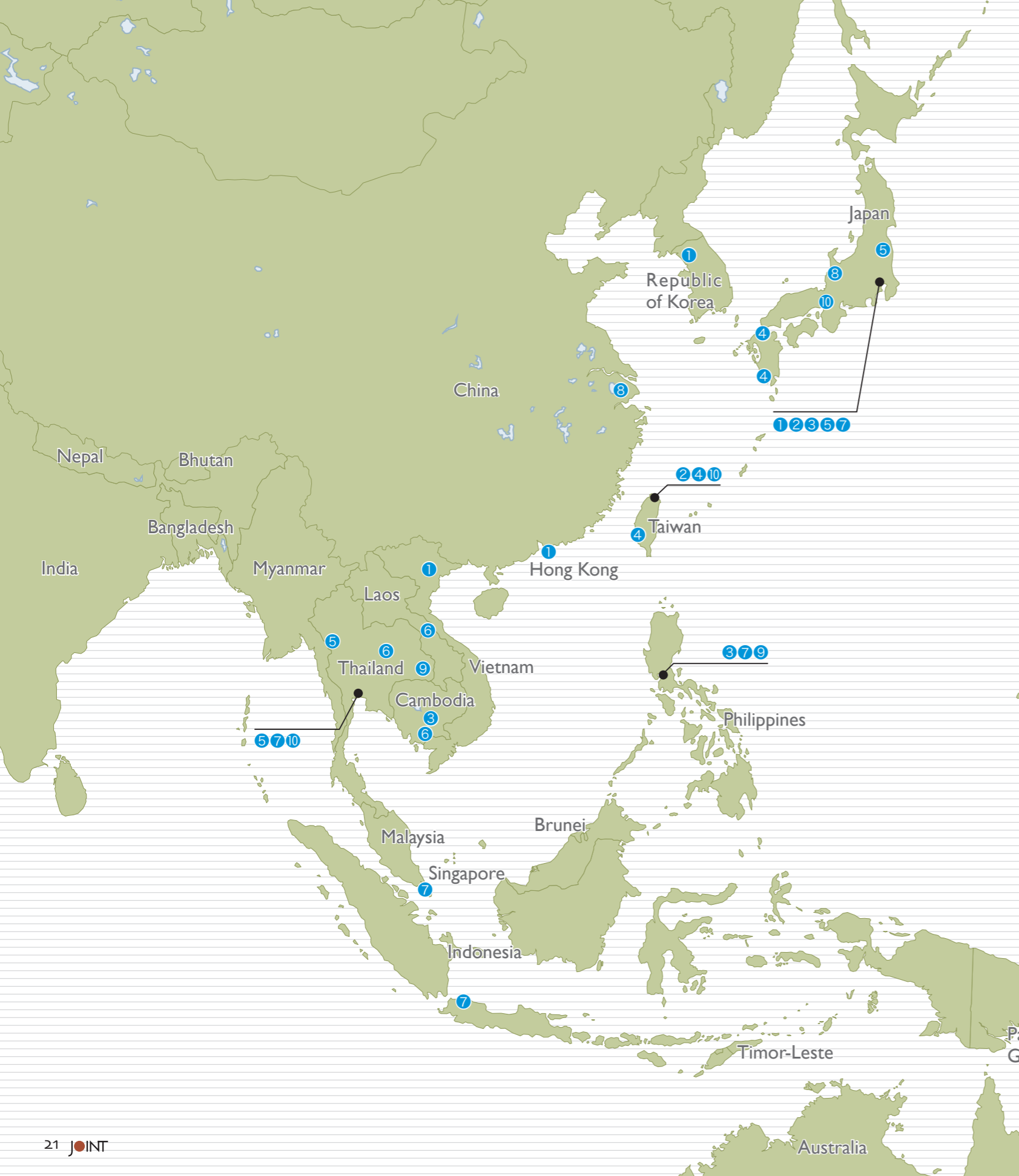
## 国際助成プログラム

### 1年助成

番号	代表者氏名	題目	助成金額 (万円)	主な活動地域
①	浦島 靖成	出稼ぎ労働者と外国投資家への文化的教育による社会の調和の実現	300	ベトナム、韓国、香港、日本
②	森 雅貴	東アジアのゼロエミッション実現を目的とした、台湾のICT・日本のエンタメを活用した市民教育・コミュニティ構築手法の共創	300	台湾、日本
③	森田 玲	多様な他者が向き合い、分かり合うためのメディア：ストーリーテリングの実地経験からの学び合い	300	カンボジア、フィリピン、日本

### 2年助成

番号	代表者氏名	題目	助成金額 (万円)	主な活動地域
④	田村 大	パンデミックによる衛生観念の変容から考える、食を取り巻くパッケージやサービスにおける人間中心の循環システムデザイン	900	台湾、日本
⑤	森 博威	日本・タイの長所を学び合い、多職種共同でコミュニティヘルスの改善を目指す教育モデルの構築	850	タイ、日本
⑥	山本 博之	メコン川流域諸国における文学と映像のコラボレーションを通じた地域の課題の共有と発信	850	カンボジア、ラオス、タイ
⑦	キハラハント 愛	アジアにおけるコロナ対策の民間による人権ベストプラクティスについての研究・相互学習とネットワーク形成	920	フィリピン、インドネシア、シンガポール、タイ、日本
⑧	河原 ノリエ	日本と中国の地域コミュニティにおける誰ひとり取り残さないがんと暮らしを問う直す学びあいの構想と実践	750	中国、日本
⑨	石原 慶一	持続可能な循環型地域経済のための財政支援プログラムの構築	860	フィリピン、タイ
⑩	行元 沙弥	気候変動と貧困問題の同時解決システム構築のため、台湾の“+モデル”をタイと日本でノウハウ移転を行い各国での展開を図る	970	タイ、台湾、日本





2 017年度から2年間(実質的にはコロナ禍の影響で3年間)、トヨタ財団の研究助成を受けて、「資本主義フロンティア周縁におけるコミュニティ再生——モザンビークにおける強制移住に関する民族誌的事例研究——」という研究プロジェクトをやらせていただきました。平たく言うと、モザンビークの南西部、南アフリカとの国境にあるリンポポ国立公園から強制移住させられた人々の生活再建について調査するというプロジェクトです。なぜモザンビーク？なぜリンポポ国立公園？なぜ強制移住？と思われるかもしれませんが、ひとつひとつ答えることで、私の研究者としての想いを綴ってみました。

モザンビークに行くようになったのは、最初は偶然でした。もともとオランダのワゲニンゲン大学で開発社会学の博士号を取り、オランダで研究職を探していたところ、2015年に、ユトレヒト大学の地球科学部がモザンビークでの社会的なビジネスモデル(Inclusive Business Model)に関する研究プロジェクトに携わることができると、パートタイムの研究者を募集しているのを知りました。その時は子どもが生まれたばかり、でも研究活動にまた戻りたい状態だったので、パートタイムという条件が都合よく思えて応募しました。もともと博士課程でブラジルのアマゾン地域の持続可能な開発に関する研究に従事していたので、モザンビークの公用語であるポルトガル語ができるというこ

パーク側に移送することでサファリ観光開発を進めることにしたのです。2021年現在、5000人が公園の外の森林地帯や都市部に再定住していますが、彼らの生業は、本来狩猟採集、年一度の雨期にたよった農業、家畜経営です。しかし狩猟は禁止、再定住先での土地は確保に時間がかかり、また干ばつも頻繁に起こるようになり、公園側が約束したインフラ整備の遅れも相まって、生計活動はなかなか再建されず、炭焼きによる森林破壊や公園内での違法狩猟など、結局環境保全に逆行する結果になっていったのです。トヨタ財団の研究プロジェクトはこの再定住の状況を詳細に調査することに焦点を置きました。

一見全く異なる熱帯雨林アマゾンとアフリカのサバンナ地域が似ているのは、環境保全と一口に言っても、その環境に暮らす人々がいる限り、その人たちの生き方、とくに生計活動とそれを可能または不可能にする政治体制を理解し、少しずつ持続可能な社会を目指す方向に動かないと、結局環境破壊が加速してしまうということです。特に、強制移住・再定住という、保全対象になる環境に暮らす住民の反発を招く方法を最初から取るならば、政府や投資元、援助機関などは覚悟を決めて長期的に再定住を支援する必要があります。

現在、世界中で2030年の持続可能な開発目標達成の必要性が叫ばれていますが、それと同時に環境保全、持続可能でクリーンなエネルギー創出(水力発電のための

「私のまなざし」  
31

## 先進国が享受する豊かさはどこからくるのか

文・写真 ● 大築 圭  
ユトレヒト大学地球科学部准教授



再定住先に初めてひかれた水道



水道が故障し7キロ離れた川で水をくむ女性達



著者と調査協力者との記念撮影



公園による再定住用地を示す看板

ともあり、すぐに雇用が決まりました。パートタイムといっても、オランダではあまり仕事をしなくてもいいからモザンビークに行つてほしいという契約で、パートナーの協力もあって、モザンビークでのフィールドワークに年に数回出かけるようになりました。

博士課程の研究では、アマゾンの森林保護を叫ぶだけでは、開発、および森林破壊に従事する人々やアグリビジネスを推進したい政治家の共感が得られず、森林破壊に勤しむ人たちが森林保護を通して生計を立てられるようにするための方策を考える必要があることが分かりました。また、そのためには、アマゾン地域の地政学、およびさまざまな生業に携わる住民の生き方をよく理解し、政策に反映する必要があるという論文を出しました。この考えは、モザンビークに行くようになってさらに強くなりました。

ユトレヒト大学の研究プロジェクトでは、リンポポ国立公園周辺のコミュニティの生計活動に資するビジネスモデルについての調査を行っていました。リンポポ国立公園は、野生動物および植生の保護、サファリ観光開発を目的として2001年に設立されましたが、近接する南アフリカのクルーガー国立公園と違い、1万人近い人々が国立公園内に居住しており、野生動物はほぼ絶滅していました。そこで、モザンビーク政府と公園への主な出資元である南アフリカ平和公園財団およびドイツ開発銀行は7000人を公園外に移住させ、野生動物をクルーガーからモザン

ダムや原子力発電所など、新たな鉱山および都市インフラ開発に伴う強制移住がさまざまな形をとって行われています。強制移住が起こることとは、再定住コミュニティが世界中で広がっているということで、私はこれらのコミュニティの再生を持続可能なものにするのが結果的に持続可能な開発を包括的に進めることにつながると考えています。

ここで包括的というのは、グローバルな目標達成のために犠牲を払う人々が出ることがないようにすることです。そのためには政府だけではなく、特に途上国に出資・援助する開発銀行、ビジネス、短期的に介入するNGOや我々研究者が、自らの役割を明らかにし、犠牲を伴う環境保全や持続可能な開発についての見地を広め、対策を練ることが必要です。

今現在の私の役割は、モザンビークという世界の最貧国、その隅っこにあるリンポポ国立公園からさらに追いやられた人たちの置かれた状況を発信することで、欧米や日本にいる私たちの豊かさがどこからくるのかを考える契機にすることだと思います。

●大築圭(おつき・けい)  
2017年度研究助成プログラム助成対象者。助成題目「資本主義フロンティア周縁におけるコミュニティ再生——モザンビークにおける強制移住に関する民族誌的事例研究——」





活動地へおじゃまします!

豊島区上池袋を訪ねて

# “まち”で生活することの実践 「木賃」で若者と地域社会をつなぐ

●武藤良太 (トヨタ財団プログラムオフィサー)

当日は、国内助成プログラム2020年度「そだてる助成」の助成対象プロジェクトの拠点である「探求→究する家(北村荘)」を最初の目的地として訪ねました。本拠点の運営を担う「ラボラトリ文鳥」の主宰である田辺裕子さんからの案内メールに従って東武東上線「北池袋駅」から歩くこと5分強。細い路地を抜けながら、目印に教えていただいた看板の前で曲がる……はて? 行き止まりの先には民家が2軒??? このご時世、見ず知らずのオジサンが自宅の庭先を彷徨く姿を目撃されたときにどうなるかを想像し、念のため田辺さんに電話をして、場所が間違っていないかを確認することになりました。……そういえば、子どもの頃は隠れん坊で知らない家の庭先に入り込んだりしたなあ」と童心に返りながら木々が生い茂る庭先を抜けると、田辺さんにお出迎えいただき、2020年10月の助成開始後、オンラインでのやり取りはあったものの、気が付けばほぼ1年が経ったタイミングで初めての(リアル)対面となりました。

**「探求→究する家」の活動**

「訪問地」  
東京都豊島区上池袋  
(上池袋一丁目~四丁目)

「助成題目」  
探求と対話の広場 — 木賃で  
若者と地域が繋がり思考と実  
践が循環するコミュニティの  
創出



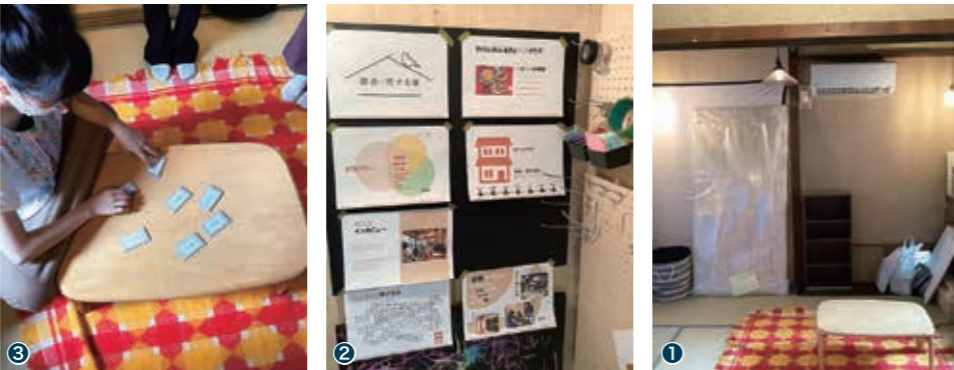
プロジェクト拠点「探求→究する家」(北村荘)。入口にちゃんと郵便受けがあることを帰り際に発見!



田辺裕子さん(左)と倉田慧一さんへのインタビュー風景。写真右手前にお手製の梅ジュースをご馳走になりました!

「探求→究する家」では、田辺さんに加えて、ロズのワークショップ等で中心的な役割を担う倉田慧一さんにもご同席いただき、まずは助成1年目の進捗状況を中心に、現時点までの成果や手応え、今後に向けた展望などをインタビューさせていただきました。

「ラボラトリ文鳥」では、「知的安心感」という言葉を大切にしながら、大きく①シェアスペースの運営、②上池袋での地域活動、③探究学習の実践的研究という3つに取り組んでいます。そのうち、国内助成プログラムの助成では①と②を対象に、拠点の整備と活用、食文化を通して相互理解を深める料理クラブ、地域の記憶と記録を共有知として蓄積していくリ



①約2週間に一度のDIYワークショップも一段落。人や時間の変化でより良い形は変わるため「造りこみ過ぎない」。②今回のプロジェクトの実施内容を整理。③参加者がそれぞれに選んだワードを用いてディスカッションしながらの「探求活動」について教えてもらうコマ。

サーチ活動、実際に町を歩き郷土史を基にしたクイズなどを通じた交流や学びの「謎解き」などを助成期間中の取り組みとして計画しています。

拠点の整備は一段落し、ワークショップなどの取り組みは定期的の実施されているものの、やはり新型コロナウイルスの影響でインタビューなど対面を重視する取り組みは計画の遅れや見直しなどが必要になってきていることでした。

田辺さんからは、「1年目は下準備の段階がメインで、2年目が実践のフェーズ。直ぐに結果が見えるものばかりではないが、小さな魅力」を分

かりやすく伝える言葉と行動を大事にして進めていきたい」という今後のに向けた思いや、「日常的な活動」と『プロジェクト』の間を行ったり来たりする、中間的な部分を表現していきたく、プロジェクト化すると生産性などが優先され探求(究)からは外れていく、しかし、日常的な活動ばかりではアウトプットが少なくなるこの課題感もある」という、多様な人の交わりや地域での営みを大切にしながらも、プロジェクトとしての結果や成果をどう生み出していくかについてのリーダーならではの率直な悩みも打ち明けていただきました。



活動開始拠点の「山田荘」「くすのき荘」

続いて訪れたのは、「探求↓究する家(北村荘)」の先輩? にあたる「くすのき荘」です。上池袋を舞台に、木賃を活用した地域づくりの取り組みは、「かみいけ木賃文化ネットワーク」という母体で2015年より活動が開始されています。その初代が「山田荘」であり、次いで「くすのき荘」に、そして、2020年度「そだてる助成」の助成も活用した3つ目の拠点となる「探求↓究する家(北村荘)」に展開してきています。



活動開始の拠点である「山田荘」(右画像)にもおじゃましました! それぞれの木賃アパートについてはウェブサイト「上池袋『山田荘+くすのき荘』」(<https://join.mokuchin-bunka.com/>)にてご覧いただけます。

私たちが「くすのき荘」に到着した際、本プロジェクトの代表者である山本直さんが地域の方(50〜60代ぐらいのご夫婦?)からご相談を受けていました。後から山本さんに伺ったところ、困りごとが解決した報告と別の頼み事の相談だったとのことですが、地域の中でしっかり関係性を築き、多様な世代が立ち寄り場として位置づけられていることが垣間見えた瞬間でした(帰り際には、入口付近で野菜の直売の準備をする若



「くすのき荘」にて、山田絵美さんから「かみいけ木賃文化ネットワーク」のご紹介をいただく一コマ。

点が相互に好影響をもたらしながら、「木賃で若者と地域社会をつなぐ」ことの実現に向けた期待に胸を膨らませつつ今回の探検を終えたいと思います。

「くすのき荘」では、山本さんと共に「かみいけ木賃文化ネットワーク」の中心的存在である山田絵美さんから、当ネットワークのこれまでの取り組みや「山田荘」「くすのき荘」とは違った場や機能をめざす「探求↓究する家(北村荘)」について改めてお話を伺いました。居住空間や共同生活の場としての姿や形がある程度固まってきた「山田荘」「くすのき荘」に対して、じっくりと考えて、じっくりと創作活動に集中したり出来る場をめざした「探求↓究する家(北村荘)」の取り組みが深まり、かみいけ木賃文化ネットワークの3つの拠



第十八回 温泉地、鳴子ならではの地域資源を活かす  
「温泉旅館の浴衣復刻プロジェクト」始動!

加賀道(トヨタ財団リサーチフェロー)

宮城県大崎市鳴子温泉にリターンして丸6年が経過しました。鳴子はその名の通り温泉地で、多種多様な泉質を誇り、その種類は日本一と言われています。古くから続く温泉旅館が沢山あり、宿の主人らの個性もさることながら、お湯もその宿の個性を際立たせています。そんなわけで、私は、宿ごとにオリジナルの浴衣があるものだと思い込んでおり、複数の旅館の浴衣生地をほぎ合わせてアロハシャツを作りたいと長年夢見ていました。いつか実現できればと、いろいろな旅館のご主人に会うたび、浴衣を譲ってもらえませんか、と聞いていたのですが、「うちはクリーニング屋からのリースに切り替えて、名入り浴衣を



集まった浴衣(上)と、旅館のご主人らとの企画会議の様子

使っていないんだ」という残念な答えばかり。効率化や経済的な理由から旅館ごとの名入り浴衣は姿を消し、画一化されたりリースの浴衣に取って代わりつつあることがわかったのです。各宿の名入り浴衣は、宿の個性のひとつであり、温泉地にとって地域資源と言っても過言ではありません。このままでは、各宿オリジナルの浴衣が無くなってしまおう! 自分がアロハシャツを着たいというだけの願望は、そこから地域を巻き込んだプロジェクトへと発展することになりました。まずは、温泉とゆかりのある「手ぬぐい」として各旅館の浴衣の柄を復刻してはどうかと考え、地域協議会「鳴子温泉もりたびの会」(詳細については当ウェブサイトや、JOINT 32号、35号の「お茶つこ通信」をご覧ください)の会員宿へ相談&聞き取り調査をおこないました。9つの旅館のうち現在も名入り浴衣を使っているのは2館のみ、その他はリースに切り替わったか、もともと浴衣を提供していない宿だったことがわかりました。名入り浴衣を使っている(いた)旅館は皆快く協力してくださり、古い浴衣を引っ張り出して企画会議



壁に貼り出した手ぬぐい案

に足を運び、温泉旅館の思い出話やさまざまな提案をしてくれました。地元デザイナーさんや染物屋さんの力も借り、浴衣の柄を手ぬぐい柄に再構成する作業、

色味を吟味する作業などを終え、どんどん完成に近づいています。ある日、ある旅館の手ぬぐいのデザインを決めかね、その宿のご主人を呼び出し壁に貼り出した手ぬぐい案を見ていただいた際、「アートのついでさ、言葉はいらないね。正直、手ぬぐい作るのに何でそんなに大騒ぎしているんだろうと思っただけ、これを見てよくわかったよ。」と一言。単に浴衣柄を手ぬぐいとして復刻させるだけでなく、手ぬぐいを手にした方に、宿泊した旅館のことや、鳴子で育まれた湯治文化、訪れた季節だけでなく四季折々の鳴子に思いを馳せてもらえる、そんな手ぬぐいにしたいと考えていたので、この企画の趣旨を理解していただいたような、そんな嬉しい瞬間でした。旅館それぞれの个性的な泉質や宿のご主人らの人柄をイメージして作った、この土地から生まれたこの土地ならではの浴衣柄の手ぬぐいが間もなく出来上がりそうです。いつか是非皆さんにも使ってもらえればと思います。





# Grant Programs

特定課題  
「外国人材の受け入れと日本社会」  
公募案内  
特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」

## 急

速に促進されている外国人材の受け入れは、日本の社会・経済にとって長期・超長期にわたる大きな変革であり、影響は極めて大きいといえます。そこで、トヨタ財団は、①外国人材が能力を最大限発揮できる環境作り、②外国人材の情報へのアクセスにおける格差の是正、③ケア・サポート体制

を担う人材と既存資源の見直し、④高度人材の流入促進、⑤日本企業の海外事業活動における知見・経験からの学びと教訓という5つの助成分野を設定し、外国人受け入れの総合的な仕組み構築への寄与が期待できる調査・研究・実践に対して助成する本プログラムを2019年度より行っています。

## 2

2021年度は、基本的な課題の解明と対応の促進、人材の育成や連携の促進、プラットフォーム構築等に資することを狙いとし、「外国人材の増加が日本社会のさまざまな面に引き起こす変化や影響と、その対応のあり方を探る」、「外国人材が直面する諸課題を生み出す仕組みの改善策を提案・実践する」、「外国人材の支援に関わる現場の人々と、その関連分野の研究者や行政、地域住民、当事者等をつなげ、共に課題解決に取り組むためのプラットフォームをつくる」を念頭に置いたうえで、助成対象者が調査・研究を行い、かつ助成期間中に課題解決や状況の改善に向けた仕組みや制度構築に取り組み活動を期待しています。

また、昨年度に引き続き、先述の分野④⑤に限り、調査・研究に主軸を置いたプロジェクトにも応募を受け付けています。

詳細・ご応募はトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

### ●募集概要

「テーマ」

外国人材の受け入れと日本社会

的・理論的に検証する研究、②実際の利活用に関する研究で、社会生活のなかでどう活用

できるのか現場を踏まえて検証するもの、③若手研究者を中心に、文理の垣根を超え国際的なネットワークづくりに寄与するもの、などを想定しています。

詳細・ご応募はトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

### ●募集概要

「テーマ」

先端技術と共創する新たな人間社会

「募集時期」

2021年10月4日～11月30日

「助成予定金額」

総額4000万円（1件あたり500万円～1000万円程度）

「助成期間」

2022年5月1日から2年または3年間

## 研

研究助成プログラムでは、2011年度～2019年度の9年間にわたり、助成テーマ「社会の新たな価値の創出をめざして」を掲げて助成を行ってまいりました。

この度、9年間のプログラムの総括として報

# PUBLICATIONS



# INFORMATION

2021年度トヨタ財団特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」連続オンラインセミナー「外国人材受け入れの最前線」子ども、雇用、健康の現場から」

## ト

トヨタ財団が2019年度より開始した特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」では、日本における外国人受け入れの総合的な仕組み構築への寄与が期待できる調

### 「募集時期」

2021年9月6日～11月20日

### 「助成予定金額」

総額5000万円（1件あたり500万円～1000万円程度）

### 「助成期間」

2022年5月1日から2年または3年間

特定課題  
「先端技術と共創する新たな人間社会」  
公募案内  
特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」

## 特

定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」では、2018年度より4年目となる2021年度は、これまでのプログラム内容を継続し、AIやIoT、ビッグデータ、ロボット、ブロックチェーンなど、先端的な科学技術をめぐる社会的諸課題に対応する研究プロジェクトを対象として公募を実施します。

## 具

体的には、①中長期視点に立ち、先端的な科学技術による社会的影響を学術

査・研究・実践活動に対して助成を行っています。

現在、さまざまなアプローチで課題に挑んでいる、2019年度・2020年度の助成対象プロジェクトの代表者を招いたオンラインでの活動報告会を開催しており、これまで全3回のうち、2回までをYouTubeにてライブ配信いたしました。

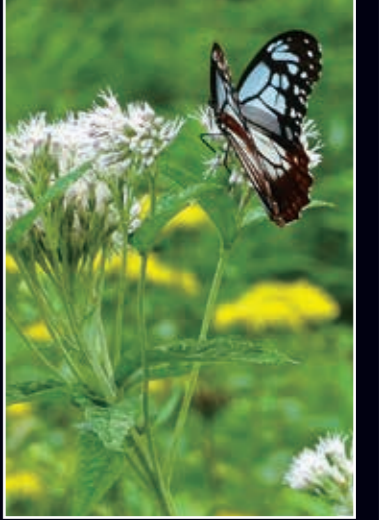
## 11

月10日(水)に開催する第3回「医療とコミュニケーション」では、スピーカーに仲佐保氏(シェアII国際保健協力市民の会共同代表)、山田秀臣氏(東京大学医学部附属病院医学部講師・国際診療部副部長)、聞き手として河野文子氏(京都大学大学院医学研究科特定助教)のお三方にご参加いただく予定です。

オンラインセミナーのライブ配信参加には事前申し込みが必要です。お申し込みはトヨタ財団ウェブサイトから行えますのでぜひご参加ください。また、本セミナーは後日アーカイブ動画をトヨタ財団のYouTubeチャンネルで公開予定です。

トヨタ財団ウェブサイト  
toyotafound.or.jp





渡りをするアサギマダラ[Y.N.]

【編集後記】  
LAST WORD

●10月初めは恒例のノーベル賞発表ウィーク。今年も物理学賞に日本人の真鍋淑郎氏が出され、日本中が歓喜に沸きました。私も日本人として大変誇りに思います。

ご存知の通り、ノーベル賞はダイナマイトの発明によって巨万の富を築いたアルフレッド・ノーベルの遺言により、その遺産の運用益を「人類のために最大の貢献をした人々」に対して分配すべく1901年から始まった大変歴史も権威もある賞です。その運営はノーベルの遺産管理を行うノーベル財団によって行われていますが、私は、同じ財団業界に身を置くものとして大変羨ましく思うと同時に、少し疑問も感じています。それは、ノーベル賞は過去の成果に対して行われるものであるということ。中には、55年も前の研究成果が評価されて受賞に至ったものもある一方で、功成り名を遂げた研究者を更に顕彰する必要性に疑問を感じます。その点、私どもは、未来の研究者・研究に対する支援をさせていただいていると自負しています。(願わくは、私どもが支援させていただいた研究者の中から、将来ノーベル賞受賞者が現れてほしいものではありません)

真鍋淑郎氏は、受賞インタビューの中で、若い研究者に対するメッセージを語られました。「研

究費を取るには実用的な問題を選ぶということになっているが、やはり本当の研究の醍醐味は好奇心。なぜこういうことが起きるのかという疑問に立って研究していくのが一番良いのじゃないか?これは、研究者のみならず、助成を行う側にとっても肝に銘ずべきメッセージだと思えます。【M.O.】

●今夏に3歳になった第一子(長男)は、「アンパンマン」から始まり「電車」「恐竜」「働く車」「トーマス」など、男の子が好きになるメジャーどころを一通り押さえながら育っています。最近では、「シンカーオン」の影響もあり、新幹線や特急列車の第二次ブームが到来中!

振り返れば、自分も同年代に、最寄り駅の傍にあった商店街の焼き鳥屋に行く父親にお供し、店のフエンス越しに夕焼け空をバックに走り抜ける「ブルートレイン(寝台特急)」を見ることが大好きでした。特に意識的に見せたわけでも教えたわけでもない中で、電車好きの血が受け継がれたことには不思議さも覚えます。

去る10月1日に、新幹線の「E4系」が定期運行を終了しました。2階建ての新幹線というその

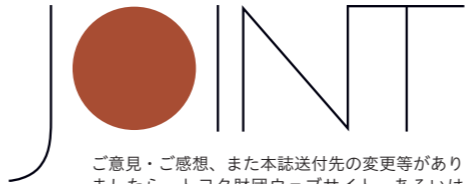
ユニークさは、かがやき(E7系)、はやぶさ(E5系)などが特にお気に入りの愛車のアンテナにも引掛かったようで、乗れなくなることを残念がっていました。

「ブルートレイン」と同様に、「E4系」も時代の流れの中でその役割を終え、姿を消していくことにノスタルジックな感情を抱き、一方で、我が子が大人になる頃にはどんな鉄道が走っているのかのワクワク感も覚えます。気兼ねなく旅行を楽しめる日が少しでも早く訪れることを願って。【R.M.】

●先日天気の良い日に自宅近くの都営植物公園に散歩に出かけ、マスク越しではありましたが金木犀や秋バラの香りに癒され、大輪のダリアに感動しました。たくさんの方の職員の方が木や花の手入れをされていて、これも「ケア」の一つだと思えました。

今回の特集では「ケアと場」について取り上げましたがいかがでしたでしょうか。同封のハガキにてご意見やご感想をお寄せいただければと思います。ウェブサイトには拡大版も掲載いたしますのでそちらもぜひご覧ください。【Y.N.】

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.37

発行日 2021年10月28日  
発行人 山本晃宏  
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団  
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1  
新宿三井ビル37階  
[TEL] 03-3344-1701  
[FAX] 03-3342-6911  
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉  
デザイン エディション・ヌース  
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



On The Journey  
—旅の途上で—

「くすのぎ荘」のアトリエスペースの一角。区画ごとに利用者の個性がにじみ出ていました。(本誌P.24参照)  
●写真撮影：武藤良大





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト  
<https://www.toyotafound.or.jp/>



UD  
FONT

